

月刊

Gekkan fetinove

2013

6月号

# フェチノベ

小説

*Goocy and Sticky*

大病

お食べ退魔録

注文の多い調理師

人外娼館の管理人

十二屋月食

神楽遊び

カムケン

魔界王国ヴェルマギア

トラム・デル

スキュラとドタバタ

エロエロにゆるにゆる生活

沈黙の天使

大江戸妖怪恋噺

たんがん

この後、納豆はスタツプが  
美味しくいただきました！

挿絵

フラットライン  
つねむくさかみ

表紙 フラットライン

R18  
Adult Only

お食べ退魔録  
注文の多い調理師

3話 お食べ退魔師よもぎ大ピンチ!? ネバネバになっちゃおう?

「ネバネバしたものがこっちに!」

大柄な少年と少女の手を引くのはゴスロリチックな烏天狗の少女。

烏天狗の少女の前に蕁苎を纏ったネバネバしたモノが蠢く。それは糸を引く豆……納豆であった。その中から小さき少女と少女の顔が出て来る。

「妖怪の癖に納豆が嫌いなんだって、許せる?」

「もちろん許せないな」

石畳をつまづき転ぶ少女に大柄な少年が駆け寄る。

「夢野!」

「幹太君……私に構わず逃げて!」

「馬鹿! 夢野を迫って逃げれるか!」

納豆塗れの少女と少年が夢野と幹太に迫る。

「これだから今時の高校生は嫌なのじゃ！」

前に立ち塞がり、ステッキを構える烏天狗の少女。

「あんた何者なの？ 見たところ妖怪のようだけれど、納豆嫌いな人間に味方するなんてね」

「お主達こそ何者じゃ！ そんなにネバネバしおって！」

納豆塗れの少年と少女はまるで一体であるかのように二つの身体をネチネチと音を立てながら、擦り合い、糸を引いていた。

「面倒臭いけど、紹介してやるよ。オレ達はお食べ妖怪、童納豆（わらなっとう）だ」

「お食べ妖怪、童納豆？ 噂には聞いておったが、まさかわしの嫌いな納豆が権化した妖怪が現れるとは…」

強烈な臭気を放つ童納豆に、鼻を摘んで嫌そうな顔をする烏天狗の少女。

「名乗ったわ。あんたも名乗りなさい」

「我が名は烏天狗、数珠（じゆず）。大人の事情で、偽名じゃが、京都のある村では有名な大妖怪じゃ」

その名を聞いた童納豆の少女の目の色が変わる。

そして…童納豆の少女が懐から何かを取り出し、数珠へと突き出す。

「な、なんじゃ!？」

数珠に差し出されたのはサインペンと色紙であった。

「サインください〜ファンなんです」

「お、おう…」

戸惑いながらも、数珠はサインをする。

「何だよ童姉（あらあね）、そいつ本当に有名大妖怪なのかよ？」

「童次（わらじ）、知らないの？ 京都の。じゅと言ったら有名よ！」

「ここはわしに免じて見逃してくれぬか？」

「駄目です！ 納豆嫌いな妖怪とあらば、見逃す訳にはいきません！ 私と公式ネバネバしましよ♡」

「逃げるのじゃ！ 夢野！ 幹太！」

数珠は宙に上がり、夢野と幹太を持ち上げようとした刹那。

「逃がさないわよ！」

童納豆の藁の一部が伸び、その数珠の黒い翼が捕らえられ、多量の納豆が吐き出される。

羽ばたく翼が粘りつく感触に数珠はビクリと身体を震わせる。

「ネバネバは嫌なのじゃ！」

倒れる数珠の翼が石床に貼り付き、粘る糸を引く。

「うふふ…：数珠ちゃん、楽しい納豆の料理の時間よ♡」

「お食べ神社まであともう少しだというのに…：！」

這う数珠の視線の先には鳥居が見えた。あと、もう少しの距離である。この鳥居を抜ければ、しきたりではお食べ妖怪も手出できないはずなのだ。

「で、オレはどっちを相手するんだ？」

「男の方に決まってるでしょ！ 女の方に手を出したら殺すから！」

「マジかよ!? こいつマジで腐ってやがる!……お食べ妖怪マジで辞めてえんだけど」

「はっ? なに言ってるの? 腐ってないで早くやんなさいよ!」

童姉が大きな糸を引いて離れると、嫌そうに目で幹太の前に歩み寄る。

「止める! 俺にそんな気は無い!」

「幹太君……ごめんなさい……私、見る事しか……」

なぜか目を背け、頬を染める夢野。

「腐女子の童姉を恨みな」

童次の粘つくその腕が伸びた刹那。煙の糸を引いた無数の札が爆散する。

周囲を白い煙が覆う。

「今のうちに早く逃げなさい!」

「お、お主は!?!」

白い煙の中から現れたのは今時では珍しいポニーテールをし、巫女服を着た少女、それは……お食べ巫女、  
紅井よもぎの姿だった。

「早く!」

よもぎが数珠の翼の粘つく納豆に札を貼ると、それが瞬時に爆ぜる。

「す、すまぬ！」

数珠は幹太と夢野を抱えると、飛翔し、空の彼方へと消えていく。

「誰かと思えば、よもぎじゃない。こんな事して許されると思ってたの？」

白い煙が晴れ、童姉と童次の姿が現れる。なぜか身体を震わすよもぎ。

「あいつら逃がして良かったの？　こんな雑魚、放っておけば良いじゃん」

「もっと納豆好きになりたくなかったのよね？　ねえ、よもぎちゃん？」

笑顔を向ける童姉によもぎは、まるで恐怖を隠すかのように下を向く。

「……私は……もう！　あんた達に負けない！　今までの私とは違う！」

「へえ、そうなんだ？　じゃあ、変わった所を見せてくれるの？」

よもぎが御幣を突く刹那。

御幣が納豆に塗れ、糸を引く。

「妹の八つ橋姫様は元気よ。あんたもお食べ妖怪になってしまえば良いのに……そうすれば永遠の快樂を食われるのよ」

そう言っつて童姉は身体に付着した納豆を腕に糸を巻くように絡みつかせてくる。

「そんな為に妹のみんちはお食べ妖怪になったんじゃないわ！」

童姉に腕を引き剥がそうとするも、納豆は強烈な粘りで、引き戻される。

「そう言えば、お食べ様に土下座して妹をお食べ妖怪にしたっていう話だけど、あれ本当の話？　マジで気になる噂なだけどさ」

童次が足に抱きつき、付着した納豆をネチネチと音を立てながら擦りつけてくる。

「やめっ!!」

「妹が嫌になつて切り離れたって訳？ だとしたら超最悪なだけど〜」

「違う！ 私は……!」

「なら、姉も仲良くさせる為にお食べ妖怪にしてあげないとな」

童納豆兄弟は抱きつき、ネチヨリネチヨリと音を立てながら、よもぎの身体の隅々まで納豆を塗していく。

「いやっ!? やめて!」

「いい感じね。童次、そろそろ藁を敷いてあげなさい」

「面倒臭いけど、料理してやるか」

童次は包んでいた藁を剥ぎ取ると、それを敷いて、よもぎを仰向けに寝かせる。

「いや……また納豆に……もうネバネバになりたくないのに!!」

よもぎが立ち上がるうとするも、藁に敷き詰められた納豆が糸を引いて、元の位置へと戻されてしまう。

「久しぶりのネバネバはどう？ 私達の特性納豆菌は糖分も混じって、鳥糞よりネバネバで、最強粘着なん

だからね〜♥」

何度も手足を動かすよもぎから粘着糸が伸び、何度も藁の中へと戻される。

「このまま放置プレイで良くね？」

「なに言ってるのよ。お食べ様に献上するんだから料理して美味しくさせないと駄目じゃない」

童姉はよもぎの帯を解き、胸をはだけさせ、袴を引き裂いて股間を露わにする。



「マジで面倒臭いんだけどさ」

「ぼやいてないでしこって白ダシをこいつにぶっかけなさい！」

「わったよ」

童次が納豆塗れの股間をしごとく、ねちよりと糸を引いて肉棒が立ち上がる。

「じゃあ、まずはお口の中ね〜♥ ほら、早く突っ込んでじゃって」

童姉が強い力でよもぎの半身を起こす。

「ほら、しゃぶれよ！」

「あぐっ!？」

童次の納豆塗れの肉棒を突き込まれ、喘ぐよもぎ。

「もっと上手くしゃぶれよ！ 美味しいだろオレの納豆おちんちんはさ？」

「ちよっと乱暴、最悪かも〜」

納豆の肉棒を突き込む童次によもぎは本能に従い、糸を引かせながらしゃぶっていく。

「そうだ。良い感じだ。お前の口まんこきゆうきゆう締まって良い感じになってきたじゃねえか」

ちゅっばちゅっばと、納豆塗れの肉棒をしゃぶるよもぎの勢いが強くなった刹那。

ドピュッ!?

童次の納豆塗れの肉棒から液体が飛び出て、よもぎの口の中を白く汚していく。

「んんっ……!？」

放心とするよもぎに童姉が歩み寄る。

「じゃあ、白ダシが出たらかき混ぜてあげないとね」

童姉が納豆と白ダシで、いっぱいになったよもぎの口の中に舌を突き入れる。

「んぐっ!？」

そのまま、童姉は気にする事なく、舌で納豆と白ダシをかき混ぜるように動かし、ネチヨネチヨと妖しい音を立てる。

口の中をかき混ぜられるよもぎの顔が、次第に快感を受け入れる目に変わっていく。

童姉がよもぎから口を離すと、糸を引いた。

「良い感じよ、よもぎ。やっぱりあんたは童納豆になるべき存在だわ」

「……私が童納豆に……？ そんなの……駄目……」

口では言ってるものの、その表情はとろんとしており、よもぎから完全に戦意が消えていた。

「ふふ……次第にそんな言葉も言えなくなるわ」

「じゃあ、身体にも白ダシをぶっかけてやっか」

童次が粘つく肉棒を上下させると、その先端から白い粘液が飛び出て、よもぎの身体にかかる。

「いやっ!？」

よもぎの口の中や身体にかかった白ダシは更なるネバネバを与えていた。喋る度に粘糸が纏わりつき、白ダシを払おうとした手がべったりと張り付いてしまう。

「胸の方にも白ダシ!」

「そんなに出るもんじゃないんだけどさ……」

「早く！」

童姉はよもぎを再び、藁に寝かせ、童次に白ダシをかけるように催促する。

「わったよ！」

童次はよもぎの豊満な胸の谷間に納豆塗れの肉棒を挟むと、しごいていく。

「ああっ!？」

「童次、そのままドピュツドピュツと出しちゃいなさい」

ドピュツ!？ ドピュツ!？

童次の肉棒からダシが射精のように放たれ、谷間が白く染まっていく。

「はいはい、出したらどいたどいた」

童次が粘る肉棒を谷間から抜き、不満そうに離れる。

「今度はお乳をかき混ぜてあげる」

童姉がかんざし型のさいばしを抜き、乳を摘む。

「はうっ!？」

「待ってね。今、お胸を気持ち良くさせてあげるから♥」

童姉はよもぎの胸を確かめるように何度も摘んでは離しを繰り返した後、谷間を残った白ダシをネチネチと音を立て、混ぜ込んでいく。

「良い粘り〜♥こんなに乳首立たせて気持ち良いんですよ？」

「はううっ!？ 気持ち良くなかない……絶対に……ひぐっ！」

よもぎは言葉で言うも、納豆と共に胸をかき混ぜられ、何度も喘ぎ声を上げる。

豊富な胸は童姉のさいばしで丹念にかき混ぜられ、白く泡立つ納豆に塗れていく。

「ほら、童次！ 身体にもかけてやんなさいよ」

「うるせえなマジで……」

童姉に促され、しかたなく童次は肉棒をしごき、よもぎの身体にまんべんなく白ダシをかけていく。

「……いやあ……」

よもぎの納豆塗れの身体が白く彩られていく。精子のようなねっとりとした液体、それは暖かく、妙な気分をさせていく。

「顔にもね」

ドピュツ!? ドピュツ!?

「いやあああつ!!」

童次に精子のような白ダシがかけられ、悲鳴を上げるよもぎ。

「精子じゃないんだから……うふ、そんなに嫌がらなくても良いのにね」

ドピュツ!? ドピュツ!?

童次の白ダシがあらぬ方向へ飛び、童姉の髪や顔へとかかる。

「あつ……ごめん」

髪や顔に付着した白ダシを拭うと、ネバアツと糸を引いた。それに不快感を覚えたのか、わなわなと納豆塗れの身体を震わせる。



「私の髪や顔にぶっかけても意味ないでしょ馬鹿！」

「どうせ……身体でかき混ぜるんだから良いじゃん」

「後で納豆シヤワー浴びないと……じゃあ、早く私の身体にぶっかけなさいよ」

「マジでお食べ妖怪辞めようかな……」

「早く！」

童姉に促され、童次は肉棒をしごくが、粘つく液が垂れるだけで、白ダシがなかなか出ない。

「……萎えた……」

「仕方ないわね」

童姉は座り込むと童次の肉棒に納豆を塗り、ネチネチと上下させる。

「ほら、いきなさい」

「……イク！」

上下させられた肉棒から多量の白ダシが放たれ、童姉はそれを気持ち良さそうに浴びる。

「うん……良い感じ」

童姉は自分にかかった白ダシを丹念に手で混ぜ込み、ネチヨネチヨと泡立たせていく。

「……何を……？」

「今度は私の全身を使って混ぜ込んであげる♡」

童姉の小さな身体がよもぎにのしかかり、くちやりと音を立てる。

「いやっ!?!」

「こうして円を描くように……ねばっとねばっと♪」

童姉の納豆塗れの身体が這い回り、ねちよりねちよりと音を立て、ネバネバとぬめりがよもぎに快感を与えていく。

「はうっ!?」

「あら？ 濡れ濡れになってきたけど、大丈夫？ うふふふ……納豆でイッテしまったのね」

「違っ!? これは納豆のネバネバが……!」

「そうなの？ こんなに濡れ濡れなのにな？」

童姉の納豆塗れの小さな指がマンコへと突き込まれ、くちやくちやりと音を立て、妖しい糸を引く。

「はうっ!? はうっ!? はうっ!? やめて……オマンコに納豆入れられたらおかしくなっちゃううっ!?」

「まだ、ほんの少し入れてないのにこんな濡れ濡れなんて……とんだ変態さんね。しかも、こんな納豆でイッちゃうなんてね」

「納豆イイ！ 納豆イイ！ ひいいっ!?」

「ほら、よもぎちゃんも納豆が好きなんだって、童次がオマンコに納豆を注ぎ入れて、ぐちやぐちやにかき混ぜてやりなさいよ」

そう言っつて、童姉は粘つく糸を引いてよもぎから離れる。

童姉からさいばしを受け取ると、ばたつかせて粘つく足を無理矢理に開かせ、でんぐり返しの途中のような態勢にさせられる。

「……な、なにを!？」

「中也納豆ネバネバにしてやるよ」

「童次は腰みの中から蕷苞を取り出すと、それをよもぎのマンコに突き込んでいた。

「……いやあっ!？」

「まだ、入ってないだろ? ほら、もっと注ぎ込んでやるよ」

「童次が蕷苞をチューブのように押し出し、マンコに納豆を注ぎ込む。

「いやあっ!?! いやあっ!?! いやあっ!?! 納豆オマンコに入ってきちゃってる!?! ネバネバ納豆オマン

コになっちゃうううっ!?!」

「納豆オマンコなら納豆のようにかき混ぜてやんないとな!」

「蕷苞が抜かれると、今度はさいばしがマンコへと突き込まれる。

「ひぎいいいっ!?! 子宮いっっちゃううううっ!?!」

「ほら、オマンコネバネバだ!」

「童次がさいばしを奥まで突き込むと、ぐるぐる円を描くようにかき混ぜられる。

「ひぎいいいっ!?! そんなにかき混ぜちゃいやっ!?! 子宮ネバネバ!?! おかしくなっちゃううううっ!?!」

「童次によってネチネチと音を立て、よもぎの納豆オマンコがかき混ぜられていく。

「そして童次がぐちゃぐちゃにマンコにかき混ぜると、納豆から黄色の液が吹き出す。

「童姉、特性よもぎダレが出てきたぞ」

「うふふ……発酵して美味しい納豆になるわね」



黄色の液が何度も吹き出すも、気にせずに童次はネチネチとかき混ぜ続ける。

オマンコ納豆が白く泡立ち、良い感じになると、よもぎは快楽で身体が痙攣し、アへ顔となっていた。

「童次、肝心なものを忘れているわ…：白ダシを入れてないじゃない」

笑顔で言う童次によもぎは驚愕の表情となる。

「おおっ!? すっかり忘れてた…：たつぷりと白ダシを入れてあげなきゃな」

童次がよもぎの身体にのしかかり、その小さな少年とは思えないほど勃起した太い肉棒をマンコへと突き込む。

ネチヨリと音を立て、納豆塗れの肉棒が子宮へと当たり、よもぎは快楽の悲鳴を上げる。

「ひぎいいいっ!? 納豆オマンコに入ってきてるうううっ!? 壊れちゃうううっ!?」

「ほら、たつぷりと白ダシを出してやるよ!」

ドピュッ!? ドピュッ!? ドピュッ!?

童次の肉棒から白ダシが吐き出され、納豆オマンコから濃厚なネバネバ液が漏れ出していく。

「はうううううっ!?」

「ほら、もつとネバネバになれよ!」

童次は何度も肉棒をピストンさせる。納豆塗れの肉棒とオマンコが何度も糸を引き、白ダシ漏れ出る。

「ひぎいいいっ!? ひぎいいいっ!? ひぎいいいっ!?!」

ドピュッ!? ドピュッ!? ドピュッ!?

そして童次の肉棒から再び、精子のような白ダシが吐き出される。

「あら、あら、そろそろ止めてあげないと壊れちゃうんじゃない？」

「どうせこいつオレ達と同じ童納豆にするんだろ？ 大丈夫だろ？」

ドピュツ!? ドピュツ!? ドピュツ!?

マンコに白ダシが吐き出され、童次はゆっくりと肉棒を引き抜く。童次の肉棒が大きな糸を引き、マンコからは白く泡立った納豆が漏れ出る。

童次が糸を引いて身体から完全に離すと、よもぎの瞳が感情のないものへと変わっていく。

「良い感じにできあがったわね♪ これで発酵させればよもぎ納豆のできあがりね♪」

粘るよもぎの身体を元の態勢に戻すと、藁苞で包むと、両端の先端を縛ってしまふ。

「じゃあ、面倒臭いが、よもぎ納豆をお食べ様に献上にしにいくか」

「納豆漬けにされ、藁苞に包まれたよもぎが童納豆兄弟に運ばれる。」

翼を飛ばたかせ、それを見下ろすのは、よもぎに助けられた烏天狗、数珠であった。

「大変じゃ！ これはお食べ神社の者に知らせねば！」

お食べ会館本部。見た目は大きな公民館のようにしか見えないが、そこは全てのお食べ妖怪が集まる総本部である。

「童納豆。お食べ巫女よもぎを捕まえたとな？」

三階席までもある大ホールの壇上に立つのは女巨人の姿だった。否、それは人とは違う姿をしていた。三角の耳に逆三角のポンチョに身を包んだそれはまるで……お食べであった。粉に塗れ、身体部分は妙な膨らみがあり、餡子でも入っているかのようだ。周囲を包む空気もニツキの匂いで満ちていた。

「そうこの女巨人こそ……お食べ妖怪を統べる、お食べ様なのである。」

「そりゃあもう、ネバネバにして差し上げました」

「いくらお食べ巫女でも、何度挑戦しようが、二百年モノのお食べ妖怪のオレ達に敵う訳ないよな」

「よもぎ納豆は調理しておるか？」

「はい、ここに！」

童次が抱えていた藁苞を開くと、茶色く色付き、納豆と共に固まったよもぎが現れる。糸を引いて逃れようと膠着している身体は、まるでサナギから羽化しようとしている蝶のようであった。

「おおっ!? これは素晴らしい! まるで納豆の美術品のようじゃな」

「固まる寸前に発酵室で温度を上げてやると、このように良い感じに粘ってくれるんですよ」

自慢気に話す童姉に同調するかのよう、周囲のお食べ妖怪達から歓声の聲が上がる。

「お、お姉ちゃん!？」

と、壇上で声を上げたのは、お食べ様と同じように三角の耳に餡子入りの逆三角のポンチョに身を包んだ普通サイズの少女だった。

「どうですか八つ橋姫様♪ 念願の姉様ですよ！」

「お姉ちゃんが納豆に……」

変わり果てた姉の姿に下を向く八つ橋姫。

「良いな八つ橋姫？ お前の姉は納豆嫌いな上、童納豆に二度も歯向かった罪として……お食べ巫女よもぎをお食べ妖怪、童納豆とする」

「はい……できればこの手で八つ橋にしたかったです……残念です」

「では、よもぎ納豆を私めの特性納豆ダレでお召し上がりください」

童次がよもぎを巨大なお椀に投げ入れる。童姉はそのお椀に乗つかると、うんこ座りの状態で自慰を始める。

ホールにくちゅくちゅと妖しい音が響くものの、気にせず童姉は自慰を続ける。すると、納豆と共にドロリとした液体が垂れ落ちる。

「おおっ!? これはなかなか美味しそうなタレじゃのお」

お食べ様に同調するかのよう周囲の席から再び、歓声が上がる。

童姉は尻で円を描くようにし、お椀の中のよもぎにどろりとしたタレをまんべんなく振りかけていく。

「童次！ かつおぶしとネギ！」

「わったよ」

童次は大きな紙袋に入ったかつおぶしと、大皿の山盛りネギをどさりとよもぎに振りかける。

「フフフ……美味しそうじゃのお」

「お食べ様。お箸です」

童姉は素早い動きで、巨大な箸置きからお箸を持ち上げ、その巨大なお食べ様の手に持たせる。

「よくくかき混ぜてやるかのお」

お食べ様はお椀の中のものもぎをお箸で、納豆と共にかき混ぜていた。

「あっ!? あっ!? あっ!?」

お椀の中がまるで、攪拌機のようにぐるぐるとかき混ぜられ、固まった納豆が柔らかくなり、本来の粘りが取り戻される。忘れかけたネバネバの快感がよもぎに伝わり、魚のように何度も跳ね上がり、糸を引く。

「どうじゃ? 気持ち良いかよもぎ? フフフ……もつと気持ち良くしてやろうぞ」

納豆がふわふわトロトロになると、お食べ様は攪拌を止める。よもぎの身体を摘み、かつおぶしとネギに塗れたふわとろ納豆をすり込むかのように上下させる。

「ひぎいいいっ!」

よもぎは硬い箸にネバネバの納豆を擦り込まれ、その身体が快楽で痙攣し、股間から納豆と共にネバネバ液がトロリと糸を引いて垂れ落ちる。

「ご飯の用意ではできておるか?」

二人の憑獣が、巨大な茶碗に入れられたほかほかの白飯を持ち上げ、お食べ様の前に持って来る。

「白飯を持って参りました」

「やはり納豆は炊きたてのご飯が一番じゃのお」

お食べ様は再び、よもぎを攪拌させると、その身体にたっぷり納豆を絡ませ、湯気の立ったご飯に乗せる。

「あああ……」

白飯を塗され、よもぎの身体が巨大な箸で持ち上げられ、お食べ様の口へと放り込まれる。

よもぎは舌でコロコロと転がされながら、歯で噛まれる。

けれど、不思議に痛みは無い。歯が当たる度に身体中のツボが刺激され、逆に気持ち良いぐらいだった。歯が尻穴やマンコにまで当たり、刺激していき、潮と一緒に中に入っていた納豆汁を吐き出していた。

「食べられてるのに……気持ちいいっ!？」

よもぎが唾液にひたひたにされ、ぬめりが増したのか、つるんとその身体がお食べ様の喉の奥へと滑っていく。

プールのスライダーのように滑り、落ちた場所は納豆の池だった。

身体を起こそうとするも、やはり納豆の粘度が高く、糸を引いて戻される。

心なしか、身体が熱い……まるで皮膚が少しずつ溶けていってるとような……

再び、諦めずに身体を起こそうとすると、細かい粘糸と共に布の切れ端のようなものが舞った。

「……えっ?」

舞った切れ端を粘つく指で擦ると、溶けて消えていく。

気づけば、ネバネバになった巫女服がボロ雑巾のようになっていた。それはまるでオブラートのようにネバネバの納豆の中で溶けていく。

「いやあっ!？」

自分はお食べ様の胃の中にいるのだ。このままではドロドロに溶かされ、お食べ妖怪に再構築されてしま

う。

暴れる度に糸を引き、元の状態へと戻される。暴れるよもぎに反応するかのように納豆に塗れた肉壁が押しつぶす。

「あああああっ!!」

肉壁はよもぎの身体の納豆を擦り込むかのように動きをし、何度もよもぎを絶頂させる。

揉まれる度に潮が吹き出し、粘つく嫌な汗が出る。それは溶け出した自分の皮膚なのかもしれない。

心なしか、自分の身体がミイラのように痩せこけて見える。肉が全てネバネバの液に変わっていくのにそれほど、時間はかからないかもしれない。

——ああ気持ち良い……私の身体がネバネバの納豆になる。

よもぎの身体が肉壁によって入念に揉まれ、白く泡立った納豆へと変わる。

肉壁は糸を引きながら何度もプレスを繰り返すと、白く泡立った納豆は四散し、消えていった。

「うはははっ!! 美味しい! 美味しいぞ! よもぎ納豆は!」

「……お姉ちゃん」

涙を浮かべる八つ橋姫。

「泣くでない八つ橋姫。すぐに姉を再構築してやるのでな」

八つ橋姫の頬に伝う涙をお食べ様の巨大な指が拭う。

「な……泣いてなどいけません!! 姉をこの手で八つ橋にしたかった悔しさで……」

「良い、良い。姉を立派なお食べ妖怪にしてやるのでな……おっ……産まれるぞ」

尻があると思われる部分からポンという音と共に餅皮が破け、巨大な卵が飛び出てくる。

巨大な卵はピシリッ!? と音を立て、ヒビが入り、真っ二つに割れる。

「えっ? これは……」

割れた卵から粘液と共に生まれ出たのは小さな少女だった。ただ、その少女は藁苞に包まれ、剥き出しの身体は納豆でネバネバであった。ただ、八つ橋姫にはその面影はどことなく、よもぎに酷似しているように思えた。

「フッフ……できたてのホヤホヤのお食べ妖怪じゃ。童納豆いや、よもぎ納豆と呼ぶかのお」

「みんな! みんな! 見て! こんなにネバネバだお」

小さいよもぎの姿をしたお食べ妖怪は手を合わせ、あやとりのように納豆の糸を引かせ、何度もそれをつ橋姫に見せる。

「これがお姉ちゃん?」

「童納豆なのでな。童なのは仕様じゃ」

「しかし……これはさすがに幼すぎませんか?」

二人の童納豆、童姉、童次と比べても、容姿から精神年齢までどう見ても低いように思えた。

「ちと……溶かしすぎたかのお」



周囲が妙な空気になったのは言うまでもない。